
俺とお嬢様と、時々親友（仮）

水無紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とお嬢様と、時々親友（仮）

【Zコード】

N6243D

【作者名】

水無紫苑

【あらすじ】

過去のしがらみ（内容はまだ決めてないw）から彼女を作らないと決めている主人公・村上敬幸をあの手この手で振り向かせようと（？）するお嬢様・青葉香織を描くドタバタらぶコメ（の予定）。

第一話 口白（前書き）

はじめまして

このお話を暇潰しで他サイトで見ていたものを加筆修正したものです。

初めての挑戦でどうなるか分かりませんが、もしよろしくさればお

付き合いくだり（――*）。

第1話 告白

「好きですー結婚して下さいー！」

「・・・え・・・無理」

これが俺とあいつの初めての出逢いだった。

あの事件（俺にしては充分事件だ）から数日後の朝。俺は普通に親友と駄弁つていた。

1年から2年にあがったばかりとはいえ、クラス替えがあつたわけでもなく、まわりはいつもと同じ顔ぶれ・・・になるハズだった。

一部を覗いて・・・

「つーか、お前。なんでここにいるんだ？俺、ちゃんと断つたよな？」

目の前にあるイスを反対に向けて我が物顔で占領している女の子。先日いきなり告白して来た女の子がこの子だ。

断るにしても言い方があつたかもな、と少し反省していたのだがそれも杞憂に終わった。

そして本来のその女の子が座っているイスの所有者であるハズの俺の親友は何も文句すら言わず、いや、なんかニヤニヤした目を向かながらこの状況を楽しんでいるふしすらある・・・

俺、友達の人選を間違えたかもしねり。

「わ、私は諦めてなんかいません！」

「そうよ！なんの文句があるって言うの！？バカ兄貴にはもつたいいぐらになんだからね！」

そう、今日はこいつの隣に強力な援軍があつた。

まあ、俺の妹ともいうのだが、二日前の入学式で初めて会つたはずなのにもう数年来の親友などばかりに一人して俺に詰め寄つてくる。

「お前らな・・・」

きへんこおんかんこおんくく

「はいはい、予鈴なつたから、そろそろ教室に戻りなさい。ほら」「む～今日は戻りますけど、ちゃんと考えておいて下さいね？私本気なんですかー！」

とかいいながら一人して自分の教室に戻つて行く。

「またね～」

「おい！」

さわやかに別れの挨拶をしている隣のニヤついた顔にツッコミを入れながら抗議してみる。明らかに楽しんでいるのだから全く意味がない無駄な行為だと知りながら。

「ははは、予鈴に救われた？w でもさあ。なんでそこまで邪険にするわけ？可愛いじゃん？」

と自分の席を奪還しつつやつぱりニヤついた顔をしながら聞いてきた。

「うつさいわw ん～可愛いのは認めるけど、～、タイプじゃないつて事してくれ。分かるだろ？」

「ふうん、お前の好みねえ・・・

「別に口リコンでもいいじゃない?」

「おい!つーか、いきなりなんだよ」

俺は今後どうしたらいいのか考える中、朝のSHRが始まったようだ・・・
今日は隣の席から興味津々な顔で割り込んできた親友に軽くツッコミをいれつつ教室に入ってきた担任の声に従い教室中が静かになる。

第1話 白石（後書き）

多分1話分はこれくらいこの長さでします。

何話まで続くか分からぬけど・・・

これとは他に似たようなお話を同時進行するので、そのお話を合わせて1週間に1話以上を目指にがんばりますw

(この先に待っているグダグダ感は見逃して貰いたい・・・おいw)

次回予告

第2話 あ～ん?

それじゃこれから私のこと好きになつてくださいー頑張りますから

第2話 あ～ん？

「……で、なんでここにいるんだ？」

田の前で嬉しそうに箸でつまんだ玉子焼きを差し出すへんな女の子がいる。

今は午前中の授業が終わって昼休み。ついさっきまで教室で友達と机を並べて購買で買つてきたパンを食べていたハズだ。

「はい、あん？」

いや、だから…

「なんでここにいるんだと聞いてるんだ！」

「微妙に答えになつてないだろ！―― つたく・・・」

ケヌケヌケヌケス・・・

横に目線を移してみると今にも爆笑しそうな顔、顔、顔

こいつら他人事だと思いやがて……いや他人事なんだぞ!けど、

「あのな、朝も言つたけど、ちやんと断つただろ？悪いけど、お前

「それじゃこれから私のこと好きになつてください！頑張りますか

「頑張るつてお前。。それはなんか違つくないか?」

「これもちゃんとアピールです！間違ってなんかいません！」

「クックク、少しふらい妥協したら?ほら、玉子焼きが待ってる

ぞ？」

「お前は黙つとけ！」

隣で机を叩きながらもう明らかに笑っている親友にマジシッコ!!を頭に叩き込む俺。

まさしく四面楚歌状態なんだがどうしよう。

ああ、すっかり忘れていた。俺の名前は村上敬幸。むらかみたかゆき私立星雲高校に通うべく平凡な高校2年生。（そうだと信じたい）言つまでもなく共学の高校で一応進学校もある。本当は家から一番近い男子校に行こうとしていたのだが、仲の良い親友（そこで笑いを噛み殺しているヤツとか・・・）に「大切な青春時代になんで野郎ばつかの監獄にいかないといけないんだ！」とマジ顔で説得され、なし崩し的にこの学校に進学した。まあ自分でもよく合格できたなあと感心するところだ。

そして目の前にいる初対面でプロポーズしやがった、このネジが1つ足りないんじゃないかという女の子が青葉香織。あおばかおり（数分前に始めて聞いた。順序逆じやね？）容姿は・・・まあおいおい分かるだろうから省略する。玉子焼きを差し出している今の状態からは想像する出来ないがれつきとしたお嬢様で本人曰く『庶民派』らしいのだが、どこの世界に専用の運転手にベンツ（しかも真っ赤）で送り迎えしてもらっている庶民派がいよう。そもそも庶民派とかいう庶民がどこにいるか・・・

と軽く自己紹介（？）した所で今の状態は変わらない。

目の前には嬉しそうに玉子焼きを差し出している青葉香織。横にはもう完全に爆笑している悪友（親友からランクダウン？）のショウとナオト。そして青葉の横では何故か機嫌が悪い妹の沙織さおりが黙々と弁当を食べている。

・・・・え？

「おい、沙織。なんでお前弁当食つてんだ？」

とりあえず目の前にある玉子焼きは無視してみた。

「食べてちや悪い？ あるから食べてるんだけど？」

質問を疑問形で返す我が妹。

「いや、なんで弁当があるんだ？」

「作ったからに決まってるじゃない！ 兄貴もつボケ始めたの？」

「いつの間に・・・ていうか、俺のは？」

「いるなんて聞いてないけど？」 ていうか、欲しいなら朝ちゃんに起きて自分で作れば？」

いや、ごもつとも・・・だがなんだが納得出来ない。

「一つ作るもの二つ作るのも同じようなもんなんだし、ついでに俺のも作つてくれたつていいじゃないか・・・」

「ふん、気が向いたらね」

そもそも俺は兄貴としてこんな扱いで大丈夫なのか？

そして俺は目の前の女の子が目を光らせた事には全く気が付かなかつた・・・

「それじゃ、私たちはそろそろ教室に戻りますね」

なんだか理不尽な扱いに落ち込んでいたことと、頭の上からそんな声がかかった。

気が付けば目の前にあつた玉子焼きは消えており、弁当を片付け教室に戻る準備を整えた青葉と沙織の姿。いつの間にか一人とも昼飯を食べ終わっていたみたいだ。

「お、おう・・・」

気のない返事をしつつ右手を軽く上げる。

教室の時計を見ると知らないうちに予鈴も鳴つていたらしく、俺は急いで残っていたパンにかじりつこうとした・・・が、ふと手が止まつた。

パンの上にひょこんと玉子焼きがお行儀良くなれてあつた。

正直、旨かった。とても意外な気がした・・・

第2話 あ～ん？（後書き）

次回予告

第3話 手作り弁当

これから花見でもするのか？

第3話 手作り弁当

「で、これはなんだ？」

なんかこのセリフは「デフォルメ化してはないだろ?」か。常に同じ事を言つているような気がする・・・

「お弁当です もちろん私の手作りですよ」

「・・・これから花見でもするのか?」

なぜか俺の机を占領している3段の重箱。

一番上は・・・中華?春雨やシコウマイやエビチリまでがぎっしりとつまっている。

二段目は・・・おせちだらうか?なんだかめでたそうな料理が並んでいる。よくもまあここまで食材を揃えたものだ。

一番下が・・・フルーツの盛り合わせ。林檎や蜜柑、パイナップルやアボガドまで、これを選り取りみどりと言つのではないだろ?か?

なんていうか、全ての段にツツ「ゴミを入れたいんだが。」

「ところでお前、白飯は食わないのか?」

「あ・・・入れるの忘れました」

「お~俺も食べていい?」

「いただきます」

どこから現れたのか(まあ席が隣と前なのが)、箸をのばそっとしている悪友2人組・・・正確にはナオは既に春巻きを掴んでいる。

「それにしても凄いねえ~!かなり早く起きて作ったんじゃない?」

「はい、朝5時に起きて作り始めたんですが、手際が悪くて・・・つこちつき出来ました!お昼に間に合つてよかつたです」

「・・・弁当作りの為に重役出勤！？」

「香織ちゃんやるねえ～」

呆れているショウと笑っているナオト。なん~分かりやすいやつらだ。

「よし、それじゃ俺は飯を食つてくる」

「ちょ、ちょっと待つたあ～！～！」

と席を立とうとした俺を慌てて押しこじめてくる。慌つまでもなく、ちよつとネジが足りないお嬢様・・・見事なツッパリ。お前、吉本いけるんじゃないか？ w

「なに・・・？」

「お皿はここにありますよ～。（ここ）」

・・・その笑顔が怖いんですけど。。

「いらん。俺は食堂行つてくる」

「せつかく村上先輩の為に作つてきたんですよ～。（うるうる）」

「そんな事頼んだ覚えもないし、それに弁当作るために遅刻してくるとか、何考てるんだ？」

「で、でも！村上先輩の為に作つてきたんですよ～。少しでもいいから食べてくださいよ～？」

俺は無視して席を立とうとするが腕に絡み付いて離れないお嬢様。

「やめろ。離せよ」

「・・・・・・」

青葉が一瞬息を呑んだのが分かったが、敬幸は気付かなかつたかのよに完全に固まつたお嬢様を振り払つて食堂に向かつた。

「お、おこ～～ちょっと待てよ！～！」

あとから追いかけてきたらしくナオトが追いついてきた。お嬢様の

お弁当は泣く泣く諦めてきたらようつだ。まあ、問題ないので無視して歩き続ける。

「おー、急にどうしたんだよー。」

「なにが？」

「はあ～香織ちゃんが固まるハズよ」

「ん・・・？」

「その目。いい加減少しほ落ち着け！」

「あ、ああ。悪い」

「まあいいけどよ。で、どうしたんだ？」

「付き合つ氣がないのに受け取れるわけないだろーが」

「んな極端な・・・氣がないってのは伝えてるわけだし、それくらいいいじゃん」

「期待を持たせるのもどうかと思つぞ？」

「・・・・・」

「・・・・・」

短い沈黙、その間にも俺たちは食堂に向かつて歩き続けている。その沈黙を先に破つたのはナオトの方だった。

「お堅いね～」

「不器用ですから」

「あはははは！　お前、まるで一重人格！――」

「だまれ！　不器用だ言つてるだろーが！――」

「・・・・・」

「・・・・・」

「でも、もう少しくらい優しくしてやつてもいいんじゃないかな？」

食堂で俺は親子丢、ナオトはラーメンを持つて席に着いた途端に口火を切られた。

「・・・・・」

「とりあえず俺たちと同じ感覚で話してやれよ。お前の気持ちくら

いは分かつてゐるけど、言ひ方は悪いがいい機会じゃないのか？」

「・・・ 考えておく」

「やうか。ま、前向きにな。あと、今日の事はちやんと謝つておけ
よ。向こうは何も知らないんだから」

「そうだな。考えておく・・・」

「またそれか」

はあ～とこれ見よがしにため息をつくナオト。

それからば一人とも一言も口をきくこともなく、黙々と丼飯と向き合ひのであった。

第3話 手作り弁当（後書き）

次回予告

第4話 取るべき距離

青葉が俺のこと嫌いになつたんならこれ以上波風立てない為にも今までまがいいんじゃないのか？

第4話 取るべ距離

「なあ、あれからどれくらいになる~？」

「・・・1週間くらいじゃないか？」

「もひそんなに経ったかあ・・・なんか最近面白くないんだよね

」

「そりだな・・・」

俺の隣でナオトとショウガ好き勝手に話をこじめながら。つことわきまで違つ話題で盛り上がってたじゃないか。

「で、ユキ。お前はどうして会つてないんだ？」

「ん？お前と同じ？」

ナオトの質問にせっけなくかえす。

「は？お前、もしかしてまだ謝つてないのかー？」

「ん？ああ、そうだな・・・」

「おい！・・・！」

「なんだ？」

「なんだ？じやねえだろ！・・・なんで謝つてないんだよッ！・・・」

「・・・会つてないから」

「じゃあなんで謝りに行かないんだよッ！・・・」

「ちょっと待て、なんでお前が熱くなつてんだよ？」

「おま・・・謝るつて言つてたじやないか・・・」

いくらか冷静になつたナオトが聞いてくる。

「そりだな。ただ、青葉が俺のこと嫌いになつたんならこれ以上波風立てない為にも今のままがいいんじゃないのか？」

「・・・本氣で言つてんのか？」

「本氣も何も、この状況で俺にどうじろつて言つんだよ？君の事好きにはなれないけどつて言つて謝りに行くのか？キライな俺に会う

事もなくてホッとしてるかも知れないだろ?」

「おい!!!!」

いきなりナオトは立ち上がり胸倉を掴んで来た。

「お前、香織ちゃんの気持ち考えた事あるのか!?!あの子本気だつたぞ!?!例えあの事で嫌われたんだとしてもさりと謝るべきだろツ!?!」

「じゃあお前は俺のこと考えた事があるのかよツ!?!..」

「・・・・・ツ!?!」

「・・・・・・」

「はいはい、ナオトもそれくらいにしろ。みんなも『ごめんねえ』なんでもないから」

シンと静まり返っていた教室で一番に口を開いたのはショウだ。ナオトの手を俺の胸倉からどかし、教室で事の成り行きを畳然として見ていたクラスメートにも軽く謝るとクラスメートたちも安心したのか教室中が元の喧騒へと戻った。

「・・・・・」

「・・・・・」

「はあ～悪い。ちょっと待つてろ」

まだ睨みあつてる二人にため息をつくとショウはそつと席を立ち、少し離れた所で電話をかけ始めた。

「悪い。ちょっとやりすぎた・・・」
「いや・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「悪い。ちょっとやりすぎた・・・」
「いや・・・」

この間数秒、程なくして重い空気を打ち破るかのようにショウが帰ってきた。右手に持った携帯電話はまだ通じているようだ、一言二

言話すと俺の携帯電話を俺に突き出してくれる。

「？」

「はい、悪いがちょっと出てくれ」

「????」

わけも分からず俺は携帯を耳に当てた。

「もしもし？」

「ツ！？」

その瞬間息を呑むような気配がし、電話が切れた。

ブーッ、ブーッ、ブーッ、ブーッ

（なんだ????）

「・・・切れたけど、いったいなんだつたんだ？」

「そうか・・・」

眉間に皺をよせたような表情をし、ショウウは残念そつしつぶやいた。

「????」

「ショウウ????」

俺もナオトも、ショウウが何をしたかったのか全く分からなかつた。

第4話 取るべ距離（後書き）

ネット小説ランキングに参加してみましたw
良かつたら下の投票欄をポチッとよろしくお願いします。ーー
*) 。

次回予告

第5話 私の初恋
でもこの時、はつきりと気が付いた。私、サオちゃんのお兄さんの事
が・・・

第5話 私の初恋

またやつてしまつた・・・

入学式当日、思い切つて先輩に会いに行つた。
あんな事言つつもりはなかつた。

でも、かなり緊張していた。

『好きです。お付き合いしてください』

そう告白するつもりだった。

なのに、口から出たのは違う言葉だった。

『好きです！結婚して下さい！』

頭の中が真っ白になつていたとはいえ、自分でもどうかと思ひ。

いきなりプロポーズするなんて・・・

それからというもの、私はかなり焦つていた。
失態を挽回しないといけなかつたし、私の事をちゃんと見て欲しか
つた。

たつた今、意味も分からずサオちゃんから受け取つた携帯電話を耳
に当てた途端、先輩の声がした。そして再び私の頭は一気に大混乱。
無意識に通話を切つてしまつた。

あの日、食堂に行こうとする先輩を止めようと腕を取つた時、一瞬
にして恐ろしさを感じ金縛りにあつたかのように身体が固まつてしまつた。あの何も信じられないといった冷めた目も怖かつたが、やはり本氣で先輩に嫌われてしまつといった恐怖の方が勝つた。

それからというもの、私は完全に塞ぎ込んでいた。今もサオちゃんが心配そうな顔を浮かべているし、ずっと落ち込む私についている。先輩に会いに行こうと手を引かれていった時もあるけど、これ以上に嫌われてしまつたらと思うと先輩のいる校舎の入り口から先に入る勇気が出なかつた。

先輩は入学式の日に会つたのが初めてだと思っているだろ?。でもそれは違う。

見たことがある程度だが幼稚園の頃から私は知つていて。そもそもサオちゃんは幼馴染だという事にすら気付いていない気がする。私は『お友達のサオちゃんを公園まで迎えに来ているお兄ちゃん』を何度も見ていてるのだ。

一人っ子の私にとって、お兄ちゃんに向かつて嬉しそうに駆けてくるサオちゃんがかなり羨ましかつたし、サオちゃんを迎える優しそうなお兄ちゃんの顔が目に焼きついた。私にもこんなお兄ちゃんがほしいなあ」と何度も思つていた。

そう最初はただの憧れだったかも知れない。

中学一年の冬、いつもなら絶対に乗らない満員電車に乗り合わせたとき、隅の方ですしづめ状態で押しつぶされそうになつていて私を偶然乗り合わせていた先輩が壁に腕を踏ん張つて空間を作ってくれた事があつた。もちろん私はサオちゃんのお兄さんだと気付いたが先輩は私の事を知らないわけだし、気付く事はなかつた。目的地でなんとか電車から降り、私がお礼を言つたのを後ろ手を上げて去つていつただけ。悔しかつた。私の事を知つてもらいたいって本氣で思つた。

これまでにも家が比較的近かつたせいか時々先輩を見かけることがあつたし、そんな時、知らず知らずのうちに決まって私は先輩の事

を目で追っていた。友達と思われる人と一緒に歩いてる時もあればサオちゃんと一緒に歩いてる時も。サオちゃんと一緒に話しかけてみればいいと思う人もいるかもしれないが緊張して足が前に動かなかつた。

今まで何でこんな気持ちになるのか分からなかつた。
でもこの時、はっきりと気付いた。私、サオちゃんのお兄さんの事が・・・

そう、これが私の初恋。

第5話 私の初恋（後書き）

次回予告

第6話 サヨナラ

・・・お前の気持ちは嬉しかったが、俺は今恋愛は出来そうにない
んだ。

第6話 わよなら

昼休み、俺はショウとナオトに連れられて1年の校舎まで来ていた。といふか、俺の悪友二人が無抵抗の俺を1年の校舎に連れていくために荒縄で縛ろうとした事には驚いた。

『お前たちはこんな趣味があつたのか…?』

『俺を変な世界に引き吊り込まないでくれ!』

『変態プレイはお前たち2人で楽しんでくれ!』

などと騒ぎ立ててようやく逃れることができたのだ。

昨日シリアスな現場を叩撃していたクラスメイトは昨日とは違った意味で啞然としていたが・・・
というか俺たちも昨日の今日でよくやるものだ・・・（まるで他人事）

「つたぐ、お前らまで来んでいいだろお~が

「まあまあ~」

「お前・・・乐しがってるだろ・・・

「そんな事ないさあ~」

ナオトの頭の上に音符マークが見えるのは気のせいだらうか・・・
そんな事をしているうちに1年の校舎に到着した。そこでふと俺は足を止める。

「どうした？怖じ氣づいたとかはなしだぞ？」

「いや、ナオト・・・青葉つて何組だ？」

「は・・・？ ショウ？」

とナオトはショウに向かつて振り返った。

「・・・ちょっと待つてろ」

ショウはそう言い残すと携帯電話を取り出しどこかへかけ始める。

「お前ら、手際悪いな」

「うっさい！お前にそ知つとナ

とナオトと軽口を叩いていりながらシヨウの電話は終わったようだ。

「3組らしい。行くぞ！」

「さつすがシヨウ頼りになるねえ～」

「お前は全く役に立つてないけどね・・・」

「・・・」

そうして俺は軽口を叩き合つて二人を置いて1年の校舎に入つて行つた。

俺は今1年3組の教室前にいる。悪友2人は俺がちゃんと向かっているのを確認するといすこかへと去つていった。一応空氣は読めるみたいだ。

入り口付近にいた男子生徒に青葉を呼び出しても、いつと青葉は沙織に付き添われながらやつてきた。そして俺はそのまま青葉を連れ出し、今は屋上に一人して立つている。

「・・・」

「・・・」

もうそろそろ5月になるといつのに屋上ではまだ冷たい風が一人の頬を通り過ぎていった。

「・・・悪かつたな」

「え・・・？」

「言い過ぎた。悪かつた」

「ううん・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・じゃあな」

「え？ 待つて！！！」

言つだけ言つて屋上から立ち去つとする俺の前に青葉は回りこみ、少し興奮した声色で慌てて呼び止めた。

「あ、あの・・・」

「なんだ？」

「先輩・・・やっぱり先輩の事が好きです。私じゃダメなんですか？」

青葉は今にも泣き出しそうな顔をしながら俺をじっと見つめながらはつきりした口調で再び告白してくる。青葉の気持ちがしつかりと伝わってくる分、俺も逃げるわけにはいかないと感じた。だから再びはつきりと答えを口にする。

「悪いな・・・」

「な、なんで・・・？」

青葉は少し青ざめた顔をしながら、それでも俺に詰め寄ってきた。

「・・・お前の気持ちは嬉しかったが、俺は今恋愛は出来そうにないんだ」

「え？」

「だから悪いな。これ以上一緒にいてもお前を傷つけるだけだらうから・・・」

「・・・」

「じゃあな・・・」

俺は青葉のふわふわした頭を2度3度ぽんぽんと叩きながら屋上の出口に向かった。

青葉は泣いているのかもう追いかけてくる気配も見せず、俺も振り返ることはなかつた。

屋上から校舎に入ったといひでショウとナオト、それに沙織と出くわした。

「お前ら、見てたのか・・・」

「バカ兄貴ッ！！！」

そう短く叫ぶと沙織は青葉の元にかけていき、ショウとナオトはそれをただ守っている。まあこの一人が青葉の元へ行ったとしても何も出来ないだろう。

「・・・今度は殴りかかってこないのか？」

自虐的に言つた俺の言葉にナオトはキザつたらしく肩をすこめたかと思つと、

「お前がちゃんと考えて決めた事だしな。これ以上俺がどうこう言えるわけがないだろう。それに・・・」

「・・・ん？」

「ふつ・・・」

ナオトとショウは意味深につぶやき、それぞれナオトは俺の右肩、ショウは俺の左肩を軽く叩くとそれ以上何も言わずに立ち去つた。

「お、おいー」

俺はわけが分からず取り残される。

(つーか、あいつら立ち聞きしてた事こまかして逃げやがったな？)

屋上ではまだ沙織と青葉が何か話をしている。慰めてでもいるのだろうか？

俺は静かにそこを立ち去つて自分の教室に向かつた。

ちゅうどその時、昼休み終了を告げる予鈴が鳴り響いた。

第6話 わよなり（後書き）

いいまでで第1章完…って感じでしょつか。

でもまだ続きますw

よかつたら今後もよろしくお付き合ください。――*。o

次回予告

第7話 友達として

ショウ・・・これはお前の差し金か？

第7話 友達として

「ショウ……これはお前の差し金か?」

「……違う」

「俺の目見て言えるか?」

「……僕は独り言を言つただけだ」

「何て……?」

「友達なら大丈夫な言い方だつたな……つて

「……だからって、それをノムか????」

俺はそのまま田の前にある重箱に田を移した。

その向こう側には飛びつきりの笑顔を向けている青葉がちょこっと

イスに座っている。

本来そこに座るべきナオトは非難とばかりかわざと席を譲つて見物モード。少しふりい抵抗してくれ……

「というわけなので、一緒に弁当食べましょ」

「……何が『というわけ』なんだ?」

「まずは私の事をよく知つてもらえるように頑張る事にしました
そして必ず敬幸先輩のハートをゲットなのです!」

軽くガツツポーズをしながら田の前にいる女の子はそつおつしゃつ
た……

「……といふことは?」

ショウも反応しなくてもいいのに……

「今はお友達で我慢します!」

なんだかどつと疲れた出でてきたよつた氣がする。

「……」

前に青葉にも言つた事だが、俺には恋愛は出来ないと思つてゐる。結果青葉を傷つけるだけだと思っているのだ。

俺は田の前で笑顔を向けている青葉に困り果ててどうするべきか隣に立つシロウとナオトに田を向けて見る。一人ともうつすらと笑みのようなものを浮かべて見返してきた。それはもう『それくらい聞き入れてやれ。後悔する事になるぞ』と言つてゐるようだった。お前等はお釈迦様か！と声を大にして問いかけたい！

「・・・・・もう好きにしろ」

「はい！好きにします」

「お前、なんかすごいな」

「ん？ そうですか？ ま、好きなんだからいいじゃありませんか？」

「それに思つたんだが、お前恥ずかしくないのか？ そんな好き好きつて・・」

「にやはは

青葉は少し頬を赤らめながら「まかすように笑つてゐる。俺は少し癒された気がしたがもちろんそんな事は言わない。ただ呆れたような顔をしていた。

「どうわけで、弁当タイムと行きましょうか

「腹減つた～！」

「今日のおかずも凄いですね～」

さつそく重箱の蓋を開け、今にも箸をのばそうとしているナオト、ショウ、そして今日も青葉と共にやつて來た妹の沙織。

「ところで、お前り・・・何勝手に食おうとしてるんだ？ それ青葉のだろ」

「いいんですよ先輩！ みんなで食べましょ もちろん先輩もですか？ 今度こそちゃんと食べて貰いますからね （にっこり）」

「お、おう・・・」

その『また逃げたらどうなるか分かつてますよね?』と言っている様な青葉の笑顔に俺はそう答えるしかなかった。

こうして、初めて5人一緒に食べる昼食が始まった。

恋の一歩を踏み出す事の出来た青葉はこれまでにないほどの満面の笑みを浮かべていた。

第7話 友達として（後書き）

次回予告

第8話 勝手な決め事

いいえ！婚約者としてもつとフレンドリーに呼び合つべきです！

第8話 勝手な決め事

俺は今、真っ赤なベンツに乗っている。
まあ言ひまでもなく青葉の車なのだが、田だつてしようがない。今
も通りを歩いている学生が好奇な目を向けている気がする。
その注目されている車の対面式のシートでは俺の田の前にはナオト
とショウ、沙織が陣取つてなにやら楽しそうに話していた。そして
俺の横には当たり前のようすに青葉が陣取つている。

「ねえねえ先輩！そろそろGWですねゴールデンウイーク」

「青葉、何が言いたいんだ？」

「みんなでどこか遊びに行きません？」

「時間があればな」

「じゃあ決まりですね 軽井沢に別荘があるんです」

「いや、まだOKしたつもりは・・・」

「決まりですよね！」

「お、おう・・・」

ある意味宣戦布告を受けて数日、俺は出来るだけ青葉に向き合つようとしている。まあ、まだぎこちなさがあるだろうが、初対面が初対面なだけにしうがない・・・と思つてくれ。

「やつた サオちゃんも先輩方も大丈夫ですか？」

「もつちろ～ん 楽しみ～」

「俺もいいぞ～」

「問題ない」

「それじゃ、4月の29日、朝8時に私の家集合つて」とどよみじくお願ひします

「 「 「 「了解～～～」 」 」

と暇人全員が賛成し、微妙に置いてけぼり感漂う俺を尻目にGWに
軽井沢旅行が決定した。

「ところで先輩？」

「なんだ？」

「『青葉』とか『先輩』とか、他人行儀だと思いませんか？」

「いや、なんの問題もないだろ？？」

「いいえ！婚約者としてもつとフレンドリー』呼び合ひべきです！」

「…」

「…・いつから婚約者になつたんだ？」

「これから婚約者になる予定なんです……」

「おいおい…」

「というわけで、『たーくん』つて呼んでもいいですか？」

「却下」

「ええ～～～！ 迂ちやんだつて彼氏さんのこと『たーくん』つて呼んでるじゃないですかあ～」

「いつたい何の話だ？ 一つ言える事は他人は他人。俺は俺だ。

「却下と言つたら却下だ」

「じゃあ、『タカクン』？」

「…・無理」

「もう～なんですかあ～へへ…」

「無理なもんは無理！」

「それじゃなんだつたらいいんですかあ～！（ぶう～）」

「そんなほっぺた膨らませてもダメなもんはだあ～め！」

と青葉のいじけた様にふくらませた頬を敬幸は両手で挟んで押しつぶすした。

「でも～…」

「ていうか、お前ついさっきも俺の事『敬幸先輩』とか言ってたじゃないか。それでいいじゃないか？」

「いいけど。私だけの特別な呼び名が欲しいです……（しゅん）」

まるで元気のなくなつた小動物みたいに落ち込む青葉。

「はあ～・・・それじゃとりあえず『敬幸』ならいいぞ？」

「・・・え？」

「だから呼び捨てでもいいって言つてんだ。『たーくん』やら『タカクン』じゃ恥ずかしすぎるから。だから、今のトコトの名前を呼び捨てで呼んでるヤツなんかいなし、それでいいだろ？ つーか、これ以上の妥協はしない！」

「は、はい！」

「ん・・」

笑顔で返事をする青葉、敬幸は青葉の頭を撫でながら、まあこれくらいならいいかと一件落着し安堵した。

「それじゃ、敬・・・幸・・・えへへ なんか照れますね」

と頬を染める青葉の姿にちょっと見惚れてしまつている敬幸。しかし敬幸にとつてはまだ一件落着したわけではなかつた。

「敬幸は私の事『香織』って呼んでくださいね？」

「え、いや、俺は別にこれまでのまま『青葉』でいいぞ？」

「か・お・り！（にしつこり）」

「は、はい・・・」

こつして、半分くらい・・・いや半分以上強制で軽井沢旅行と敬幸と香織のお互いへの呼び名が決まつた。

俺、このままいいのだろうか・・・

第8話 勝手な決め事（後書き）

え～っと、突然ごめんなさい。

今日を最後にNETが使えない状況なり、少しの間更新が出来なくなります^ ^；

携帯から更新しようと思つてたんですが、よく分からぬ。1110rzn(おいw

なので、読んで頂いてる方にも申し訳ありません。

恐らく3月中には再開できると思ひますので、少々お待ちください。

○(――*)○

次回予告

第9話 膝枕

お前、今の状況が分かつてないだろ？

第9話 膝枕

（こんな鉄の塊が空を飛ぶなんてありえない……）

と、理系を選択している癖にこんな批判を脳内で連発している俺。いや、声に出したら白い目で見られる事は分かりきっている。でも無理なものは無理！ 分かるだろ？ この気持ち。

軽井沢旅行出発の日、待ち合わせの青葉邸（家というより邸宅と言う方がしっくりくる）で俺たちが見たものは庭の一隅にあるペリポーテに留まっている巨大ヘリ。何ていうのかは知らないが、前部と後部の一箇所にそれぞれ2対ずつあるプロペラという時点で俺たちの認識している『ヘリコプター』と違う。内装もここはどこの高級ホテルですか？ って程広い。というか、ここが本当にヘリの中だとは考えられないほどの豪華さだ。俺はこの時点で不覚にも安心してしまっていた・・・

香織が軽井沢までヘリで行くと言い出した時、俺は一瞬硬直した。そして必死になつて反対を表明した。高校生の交通手段じゃないだろ？と、自分では至極最もな事を言つてゐるつもりだった。しかし初めて乗るヘリコプターに興奮した沙織とナオトを筆頭にその場の全員が俺の主張を無視。ここに民主主義における俺の敗退が決まった。それでも内装を見てこれなら大丈夫かもしれないと思っていた。そう数分前までは・・・

この旅行にはショウやナオト以外にも俺のクラスメイトが参加して

いる。腰まである漆黒の髪には天使の輪が浮かび、清楚な雰囲気を漂わせる彼女の名前は眞鍋梓織。^{まなべしおつ}1年前、星雲高校の入学式で知り合い、同じクラス、席も目の前だったという縁から話をするようになった。ショウやナオトたちと共に休日に遊びに行くこともあるほどの仲だ。まあ、女友達筆頭（？）みたいな感じだろうか？ちなみに、本人の前では言えないが俺的には男友達扱いだったりする。

その梓織は俺の左側で初めてのヘリコプターに興奮したナオトのマシンガントークを笑いながら聞き流している。俺の右側では窓の外の見ながらはしゃいだように騒ぐ沙織に苦笑いを浮かべながらも相槌を打っているショウ。そして俺はなるべく外が見えないようにうつむき、ガタガタと震えながら真っ青になっていた。

ヘリが浮かび始めて10秒後、まだ余裕。

それから20秒後、多分大丈夫。

1分後、すでに後悔し始めた俺。

ヘリが上空千メートルを超える高さを飛び始めてからはもう気分が悪いわ、眩暈^{めまい}がするような気がして・・・程なく完全グロッキー状態に陥った。

ついさっきまでは俺の隣で楽しそうに話しかけていた香織も、俺が何も反応を示さなくなつた事に飽きたのか、何も言わず俺の左腕に自分の右腕を絡ませながら笑顔を振りまいている。普段なら腕を振りほどこうとするだろうが、今の俺はそんな余裕はない。ショウもナオトも梓織も我が妹も、真っ青になつてている俺に気付きながらも完全無視。香織に至つてはいつもは抵抗する俺が嫌がらないもんだから「今のうちに充電」とか言いながら普段簡単には出来ない事

を楽しんでいいフシが見える。・・・お前たち、俺の事が心配じゃないのか？俺、マジで死にそつなんだけど・・・「ははは、こんな事考えられるんならまだ余裕だな」そんな強がりを思いながらもだんだん目の前がブラックアウトしていく・・・既に限界を超えていたようだ。

みんなの笑った声が聞こえる。木々のザワザワとした音が聞こえ、ひんやりとした風が頬を撫でる。目を開けると青々と茂った大きな木の間から快晴の空が見えた。

気付いた時には既に軽井沢に到着しており、俺は日陰になつた緑の芝生の上で寝ていた。みんなは少し離れたところでピクニックのようニシートを広げ昼食を取っている。

「あ、起きましたか？」

頭の上から香織らしき声が聞こえる。まだ完全に覚醒していない俺がボーッとしている、

「みなさま～ん！ 起きたみたいですよ～」

という声が再び頭の上から聞こえ、その声に反応するかのようにバタバタとこちらに近づいてくる足音が聞こえた。

「おはよ～」
「よく寝てましたね」
「気持ちよかつたか～？」
思い思いの言葉を口にしながら近づいてくる御一行様。ちなみに、上から沙織、梓織、ナオトの順。
「ん～・・・つーか、最悪だつたよ。気持ちいいわけないだろ。今もまだ宙に浮いてる感じがして気持ち悪い」

「お前、今の状況が分かってないだろ?」

「は・・・?」

そう、ショウに指摘されて始めて気付いたのだが、俺は香織に膝枕された状態で眠っていたのだ。

「ちょっと、気持ちが悪いってどうこう事ですか!?.」

香織が俺の言葉に反応して怒っているが、その声はなんだか嬉しそうでもあった。

見渡さずとも分かる。みんなのどのようじにじりてやるひつかと考えているようなちよつとムカつく顔。

そして、ついさっきまで文句を言っていた事も忘れて、香織が少し頬を赤らめながらも満面の笑みを浮かべている姿を。

第9話 膝枕（後書き）

というわけで無事（？）に再開することが出来ました。
待つてくれた人はいるのかなあ～？いたいいなあ～・・・笑
よかつたら再びよろしくお願ひします。ーー*。

次回予告

第10話 西洋の城！？
あ、俺こんなラブホ見たことあるかも！

第10話 西洋の城！？

「（）は日本・・・だよね？」

「多分。俺も自信がなくなつてきた・・・」

「これ、お城？」

「いや・・・どうかな？」

「あ、俺こんなラブホ見たことあるかも！」

「「「それは絶対違う！・・・」」」

4人の見事な連携のツツコミを全身に浴び悶絶するナオト。

俺たちは青葉の別荘を見上げて唚然としていた。

そもそも香織が「私の別荘です」って言つたから別荘だと認識しているだけで、西洋の城だと言われた方がしつくつくるほどだ。

「（）でみなさんに残念なお知らせがありまあ～っす！」

唚然としている俺たち5人に向かつてこの別荘の所有者であるお嬢様が場違いのような声を上げた。

「「「「？」？」」」

「実は、お部屋は管理人さんにお掃除とかして貰つて完璧なんですが、食料を買つて来るのを忘れちゃいました！・・・」

「は？」

「だから、これから買つに行かなくてはいけません！」

「「「「？」？」」」

今度は違つた意味で香織以外の一団は唚然となる。そして、その困難なミッションを考えて青ざめた。そう、さつき俺たちの目の前で俺たちが乗つてきたヘリは帰つていつた。いつもこの別荘を管理しているという管理人さんには休暇をとえたらしくここにはいない。今この場にいるのは俺たち6人だけという事になる。そしてこの玄関（？）から門まですら一キロはあるうかという上に、この別荘の

周りには肉眼では何も見えない。

「一応確認するが・・・」そこから一番近い店までどれくらいかかるんだ？」

「ん～・・・1時間・・・2時間もあればいけると思いますよ？これからいけばギリギリって所でしょうか」

「・・・・・・・・」

「お、そうだ！電話してさつきのヘリにもう一度来てもらいつつのはどうだ？」

一同の沈黙を破つてさも名案だとばかりにナオトが提案する。

「いえ、もう今頃はお父様たちが移動に使つてているはずです。ビニに行くのかは知りませんが、無理ですね」

「・・・・・・・・」

こうしてじやんけんに負けた俺とナオトと沙織の3人が食料買出しの旅に赴く事になった。

5時間後、案内役がいない為道に迷い、帰りは数日分の荷物を持ちながらの行軍に予定時間を1時間もオーバーした俺たち3人は重い足を引きずりながら別荘にたどり着いた。

「づ～が～れ～だあ～！！！」

「おそかつたですね～」

キツチンに倒れこむように荷物を置く俺たち3人に香織は何の労りもなくおっしゃる・・・さすがはお嬢さま。つーか、お前『庶民派』とか言つてなかつたつけ？

「オメー全然地図あつてねえ～じゃないかよ！」

「ええ～地図見間違えたんじゃないですかあ～？」

「とりあえず、殴つていい？？」

「暴力反対！うう・・・」

はあ・・・泣き真似で逃げられた。

「つーわけで、飯の支度は留守番組でどうにかしてくれ~」

「はあ~い！ わかりました」

「ゲンキンなや・・・」

「何かいいました？」

「いいえ・・・」

こつして夜は更けて行くのであった・・・

ちなみに次の日、全身筋肉痛で遊ぶどころじゃなかつたのは言つま
でもない・・・

第10話 西洋の城！？（後書き）

次回予告

第11話 ホームラン！

だ、誰だよ。テニスは野球よりも簡単だつて言ったヤツは・・・

第1-1話 ホームラン！

「ねえねえ香織ちゃん！近くに遊ぶといらっしゃないの？」

3日目の朝食後、これから何をして遊ぼうかと話している時にナオトが香織に聞いた。

「遊ぶところですか？ うーん、近くても送迎の車がありませんし、歩いて行くのは大変ですよ？」

「そつか～やつぱり無理か」

「別にそんなのいいだろ？ 昨日周りを歩いてみたけど、この家の敷地内にいろいろあるっぽいぞ？」

そう言つたのはショウ。俺たちの知らないうちに別荘の中を散歩していらっしゃい。一瞬誘つてくれよ！とも思ったが、一昨日の俺はへりに乗つて失神し、買い出しで燃え尽きて使い物にならなかつた。そして昨日は全身筋肉痛。これは仕方ないかも知れない。ていうか、ナオトは昨日何してたんだ？

「そりなのか！？ で、何があるんだ？」

この質問には再びこの別荘の持ち主である香織が答えた。

「そうですね～テニスコートとかありますよ～」

「テニス・・・俺した事な。簡単なの？」

「ラケットでボールを打つだけですから。野球よりも簡単に当たると思ひますよ？」

「よし、今日はテニスやるぞ！」

「おー、他のもあるんだし勝手に・・・」

同じくテニスをやつたことがない俺が反対しようとする。

「それじゃ今日はテニスですね！」

「よし！罰ゲーム決めるぞお～！」

「おー・・・」

「うして俺の言葉は聞こえなかつたものとされ、テニスをする事が

決まった。

つーか、罰ゲームって初めてテニスするくせにどこからそんな自信が出てくるんだ？

「おいナオト！思いつきり振り回すバカがどこにいるんだ！！！」
俺が怒鳴るようにナオトの打った球はテニスコートを囲んでいるフ
エンスを軽く飛び越え、今日何度も分からぬ場外ホームランにな
った。

「悪い悪い。思いつきり打った方が気持ち良くてな」

「お前、これじゃ試合にならんだろう・・・」

「まあまあ、てことでユキまた頼むわ」

「はいはい、つーか予め外にいた方がいいんじゃないかなって想いは
じめた・・・」

そう言いながら俺は再びナオトが放ったホームランボールを探しに行
った。つーか、探す俺の見にもなって欲しい。大変なんだぞ？

結局、総当たり戦をして優勝香織、準優勝ショウ、3位梓織、全敗
で断トツ最下位はナオトだった。

「だ、誰だよ。テニスは野球よりも簡単だって言つたヤツは・・・」

「はい！ 私です」

完全に愚痴りモードに入ったナオトに香織が笑顔で答える。いや、
そこは元気に答える場面じゃねえぞ？

「あれだけホームラン打つてたら勝てないよね。安藤くん罰ゲーム
がんばってね」

梓織のトドメとも言える一言でナオトは完全に沈黙した。

罰ゲーム・・・自業自得だな。

第11話 ホームラン！（後書き）

次回予告

第12話 勇氣と無謀

諸君！これより我々は玉碎を覚悟で任務にあたる事になる！

第1-2話 勇氣と無謀

「それじゃ、あんどう安藤先輩の罰ゲームは『一人でお風呂に入る』でいいですか？」

ふと思い出したように香織が罰ゲームの内容の提案をした。ちなみに、『安藤』っていうのはナオトの名字でショウは杉原すぎはらって名字だつたりする。

「それじゃ罰ゲームとして普通すぎないか？」

もつともらしい疑問を投げかける俺。

「えへへ～これでいいんです で、みなさんいいですか？」
みんなよく分かつてないながらも賛成した。俺的にはナオトの罰ゲームなんかどうでもいいと言えばどうでもいい。

「では、安藤先輩の罰ゲームは『一人でお風呂に入る』で 安藤先輩もそれでいいですね？」

「・・・・・」

ナオトは相変わらずまだ燃え尽きたまま、無意識にだらうか頭が上下したような気がした。まあナオトに罰ゲームの拒否権なんかないんだけど・・・

「それじゃ、温泉に行きましょう」

そして香織は当たり前のように話を続けた。

「え、近くにあるのか？」

「敷地内にあるんです もちろん源泉たれ流しですよー！」

・・・マ、マジっすか？ ていうか、たれ流さないで下さい。普通にかけ流してよ・・・

「よし！ 今から温泉行くぞ！ すぐに温泉行くぞ！ ……」

「ナオト、いつ復活したんだ？」

「そんな細かい事気にするな！ さあさと温泉行く準備しろー！」

「お前、こいつから温泉好きになつたんだ？」

「何を言つ心の友シヨウよ！俺は昔から温泉大好きだぞ？」

「「初めて聞いた・・・」」

俺とシヨウの言葉が重なつた。

そしてふいに香織の声がかけられた。

「安藤先輩？先輩は“1人でお風呂”ですよ？」

につこり笑顔の香織はちょっと、怖かつた・・・

カポーン・・・・

青葉家の温泉。

水の流れる音と、鹿威しの音が響き渡る。風流とかは分からぬが、水の音と竹が石を叩く音が心地よく身体に流れ来て、見渡せば枯山水など視覚も楽しむ事が出来、これぞ日本の庭園つて感じがする。正直、西洋の城に温泉なんてつて思つたけど、下手な高級旅館の温泉よりも日本っぽいかもしねえ。この場所だけ。

そんな静かで趣の溢れる温泉に場違いとも思えるぐぐもつた声が聞こえる。

「諸君！これより我々は玉碎を覚悟で任務にあたる事になる！」

「・・・・・」

「・・・・・」

といひで、なぜここにナオトがいるのだろうか？確かに別荘内にある風呂（といつても流石は青葉家の別荘でヤケにデカかつたが）に押し込んだハズだ。つつかえ棒もして完全に出口を塞いだのに。

「なんでここにお前がいるんだ？」

「ふつ、愚問だ。漢にはやらなければならない時があるので！――！」

答えになつてない答えが返つてきた。

「あつそ・・・」

「めんなさい、ついていけません。

「おい！なぜそんなにテンションが低いんだ！」の壇の向こうには

樂園が広がっているんだぞ！」

お前のテンションが異常なんだ……とは思つたけど、言わない。

「そんな事よりもそんなに大声出してもいいのか？」

そしてショウの冷静なツッコミに慌てて声を潜めるナオト。

「！？ 危ない、これは超極秘ミッションだった。これより先は物音一つ禁止する！」

「音立ててるのはナオトだけだけだけどな……」

「ユキ、極秘ミッションだつて言つてるだろ！ 静かにしろ……！」

「つーか、お前、俺たちが黙認してやってんだから少しさは自重しろよ……」

「その事には感謝している。俺にこんなチャンスを与えてくれたのだから！ ああ神よ、アーメン……」

いつからこいつはキリシタンになつたんだ？ 時々暴走するナオトはわけが分からなくなる。無理にでも追い返せばよかつた。今はナオトに同情した事を後悔している。ナオトを温泉に近づけさせない策を取つた香織の人を見る目もなかなかのものだ。

「へいへい。勝手にやつてろ」

「ごめんなさい女湯に入つてゐみなさん。俺にはこのナオトを止める
ことは出来ませんでした……」

バカ

第1-2話 勇氣と無謀（後書き）

次回予告

第13話 ナオトの野望

お前らこれは漢の口マンだろー。

第1-3話 ナオトの野望（前書き）

「めんなさい。」

もし、この小説を楽しみにして下さっていた読者の方がいらっしゃいましたら、本当に「めんなさい」です。
ちょっと色々あって・・・って言い訳ですね。

これからもいつ更新されるか分かりませんが、読んで行って下されば幸いです。
では、短いですが楽しんで頂ければ・・・

第1-3話 ナオトの野望

そんなバカな会話が男湯で交わされていた頃、
「黒田さんも村上さんもごめんね。あんな先輩たちで・・・」
「眞鍋先輩が謝る事じゃないですって！来たら返り討ちにしてやり
ますから！それに私の事は『沙織』でいいですよ。バカ兄貴と同じ
ような呼び方じゃ紛らわしいですし」

確認しておぐが、敬幸は女風呂を覗こうとはしていない。いや、逆
にナオトの暴走を止めようとしているのだが、血の繫がった妹は兄
の事を信用していないうらしい。

「それじゃ私も『香織』でいいですよー」

「ありがとう。それじゃ沙織ちゃんと香織ちゃんね。私の事も梓織
でいいわよ」

「はあ～い！梓織先輩！」

「それにしても、梓織先輩の肌キレイですね～」

「え？香織ちゃん！？」

「ホントスベスベです～」

「沙織ちゃんも！？」

「それ！触っちゃえ！ーーー！」

「え、ちょっと…きやー！」

「お、おーーー向こうから悲鳴が聞こえなかつたか！？」

「いや、聞こえたけどさ、お前それはマズくないか？」

ナオトの今の状況、枯山水のド真ん中を突つ切つて男湯と女湯の壆
にへばり付いている。風情もなにもへつたくりもない状態。むしろ
台無し。そんな見苦しいナオトが振り返つて湯に浸かっている敬幸
とショウに向かつて指示を出そうとする。

「おー！コキ！シヨウー馬になれーーー！」

「やめだよ」

とショウ。もちろん俺も、

「右に同じ」
おとじ

「人間の心の構造」

「へむ。なるほど……」

ショウの適当な言葉で納得してしまつたナオト。ていうか、お前が馬になつてるみたいだが、覗くヤツなんていいぞ? ナオトも遅まきながらその事に気付いたらしい。1人で悶え苦しんでいる。そんな事を考えていたら、何を考えたのか、なんとナオトは塀をよじ登り始めた。

ちなみに書いておくと、塙とは書いてても簡素に作られた敷居みたいなもので、どう見ても強度はありそうにない。

第13話 ナオトの野望（後書き）

次回予告

第14話 罪と罰

このバカ兄貴ッ！－！痴漢ッ！－！変態ッ！－！

第1-4話 罪と罰（前書き）

当初の目標を思い出し、

どちらかの話を1週間1話更新目標して頑張ります。
では最新話、よかつたら読んでいい下さい。

第14話 罪と罰

何故そんな事にも気付かないのだ？。

簡易に作られた弊によじ登る危険を。

その弊によじ登った時に起くるであろう出来事を。

その出来事が起こった際に生じる突き刺さるような冷たい視線を。

今、俺の目の前には地べたにキスするよつよつ伏せに横たわって動かないナオト^{バカ}が一人。

そしてその向こうにはビックリして声も出ない梓織に、怒りで声が出ない沙織、あっけに取られて声が出ない香織の姿があった。

そして次の瞬間・・・

「　　きやあ～～～～！～～～～！」

「このバカ兄貴ッ！－！痴漢ッ！－！変態ッ！－！」

烈火の如く怒りをあらわにする沙織。

ゴミでも見るかのように睨む香織。

いまだに泣き続ける梓織。

・・・一番年上がそれでいいのだろうか？
「兄貴ッ！ちやんと反省してるの！？」

そんな事を思つていたら再び沙織の叱責が飛んできた。

今は露天風呂からリビングに場所を移している。

あの状況じゃ気まずいし、まともに話も出来ないと思つたから。ただ、場所を移してもまともな話なんか出来ず、一方的に女性陣から責められ続けている。

そして女性陣3人はソファーに座り、俺とショウは床に正座。ていうか、俺が悪いの!? 悪いのはナオトじゃね!?

ちなみに当のナオトはまだ露天風呂でのびている。一度は田覚めて起き上がろうとしたのだが、とっさに梓織が投げた桶が命中し再び地べたにキスをする事になつた。

「あの・・・」

「何ッ!」

「俺たち、何もしてないんだけど・・・」

「「同罪です!!!!」

「ごめん・・・」

沙織と香織の見事なハモリに俺はとっさに罪を認めるような発言をするしかなかつた。

結局、謝り続け、ナオトの分もショウと一緒に土下座しまくり、この旅行中ナオトが女性陣の下僕となる事でなんとか許してもらつた。あいつが悪いんだし、それくらいの罰はしそうがないだろ? 文句を言つてきてもショウが黙らせてくれるハズだ。

土下座には付き合つてくれたが、一言も言葉を発しないショウが怒りまくつていることは言つまでもない。

第14話 罪と罰（後書き）

次回予告

第15話 軽井沢の夜
星、好きなんですか？

第15話 軽井沢の夜

「ふう～・・・」

軽井沢旅行の最終日の夜。

たくさん遊んだ。テニスではショウが意外な強さを發揮させたし、乗馬では俺とナオトは落馬した。（軽症でよかつたよ、ホント）バスクのリングがあつたから30円もしたし、近くにハイキングにも行つた。夜には酒も飲ん・・・（いやいや、未成年なんでお酒なんて飲んでませんよ？）そうそう夜にはトランプやビリヤードもした。一昨日の麻雀はキツかつたな。結局一睡も出来なかつたし・・・（もちろん何も賭けてないぜ？いや、賭けてても賭けてないっていうけどな！）そのせいで今日は木陰で昼寝してしまつて、もう深夜なのにおめめパチリだつたりする。

そんなわけで俺は一人別荘を抜け出し、庭で星を眺めていた。ついでか、ただの庭つていうより庭園？客室とか言って1人1部屋だったし、ここに来て香織の家の凄さが嫌という程に分かつた。

「はあ～明後日には学校かあ～・・・」

「ふふふ、先輩^{たそがれ}黄昏^{たそがれ}てますねえ～」

星から目を離し振り返ると、そこにはパジャマ姿の香織が立つていた。

「ああ、青葉か・・・」

「むう～！か・お・りです！」

「お前だつてつこせつき先輩つーたろづが！」

「あつ！～！」

「バカめ！」

「いちわる・・・」

「で、お前はこんな時間に何してんだ？」

「なんとなく？敬幸がいてラッキー！みたいな？」

「んなバカな事言つてないでちゃんと寝ろよな」

「で、敬幸はこんな所で何してるんですか？」

「気苦労が多いんだこれでも。誰かさんがすぐこいつこいつ来るし、

恥ずかしいセリフも平氣で言つて来るし？」

「ええ～そんな人いるんですか！？」

と言ひながら俺の腕にからまつてくる香織。

「ああ、今俺の隣にいるやつとかな」

「私はいいんです！だつて・・・」

「『婚約者だから。』だろ？」

敬幸はため息混じりに香織の言葉を遮つた。

「ついに認めてくれるんですか！？」

「いや、お前のぐだらん頭ん中くらいお見通しつてだけだ」

「ま、自覚を持つてくれたってだけで大進歩ですね」

「勝手に言つてわ」

そういうい捨てて俺は再び星空に目を戻した。

「星、好きなんですか？」

しばらく隣で星を眺めていた香織が目線をそのままに聞いてきた。

「あ～どうだろ。こんな星空見た事なかつたからな」

「そうですね。まるでプラネタリウムみたい。・・・行つた事ないけど」

「おい！」

「だつて、これまで学校の行事とかあんまり出たことないし、自由に遊びに行けなかつたんだもん！」

「やうか・・・」

「ここで、今度敬幸が連れて行つてね」

「1人で勝手に行つてろ・・・それにこれ以上の星空は見れないと
思つた・・・」

「ふう～ん、ならこのままでいいか!」

そう言って香織は一段と敬幸にくつつくように腕を絡ませてきた。

「おこ・・・」

そうして敬幸と香織は再び夜空を見上げていた。それはまるで仲の
良い恋人のようで・・・

クシュン!

5円とはいえ、夜はまだ肌寒い。横を見ると香織が手を口すりながら少し震えていた。

「パジャマなんかで外に出るから。風邪引く前にこれでも着とけ」と寒いだろ？と思つて着ていた上着を香織に差し出す。

「え、でも借りちゃつたら敬幸が・・・」

「あ～バカは風邪引かないつついし、お前が風邪引いたら話にならんだる。それともこれから何か取つてくるのか？」

「そ、それじゃ、ありがとうございます」

と香織は袖に手を通さずに羽織る形で肩にかける。

「ん～敬幸のにおこ（はーと）」

「・・・それ以上言つと返してもひづる？」

「はあ～い

第15話 軽井沢の夜（後書き）

次回予告

第16話 賭け

ちょっと散歩しませんか？

第16話 賭け

「さて、そろそろ寝るか・・・」
そう言って、もたれかかっていた手すりから離れようとした敬幸の
シャツの端を取つて香織が引き止めた。

「いや・・・」

「おいおい、そろそろ寝ないと明日がマズイだろ」

「あ、あのー」

「ん?」

「ちょっと散歩しませんか?」

「俺は昼に寝てるからいいけど、お前は寝ないで大丈夫なのか?」

「寝るよりも敬幸とのデート優先です!」

「あそ・・・」

「それじゃ、お散歩にしゅっぱあ～っつ!」

「ちょ・・・俺まだOKしてな・・・」

と元気良く宣言して香織は敬幸の腕を取つて歩き出した。

(ちゃんと拒否した方がよかつたかもしぬ。深夜なのにこのチ
ンショソント・・・)

ダンツ、ダンツ、ダンツ・・・

散歩の途中、バスケットコートの横に差し掛かった時、コートの隅
に昼間遊んだまま放置していたボールを見つけた俺は香織に一言断
つてから軽くドリブルしながらフリースローラインへ向かつた。ボ
ールを目の前に掲げ、少しの間精神統一をしてからゴールへ向かつ
てボールを放つ・・・

「チツ！
ガンツ！

リングへ到達する前に外れるのを察知した敬幸はそのまま「ホール下に走り込み、落ちてきたボールをキャッチするやそのままレイアッシュショート！今度こそ「ゴール吸い込まれたボールを再びドリブルしている。

「取り繕つてもダメですよ～」
「今のも簡単じゃないだぞ・・・」
「そうですか？簡単にやつてたように見えたけど？」
「ふつ、素人が・・・」
「敬幸だつて素人じやない！それにレイアップくらい私だつて出来るもん！」
「じゃあお前もやつてみるか？」
「えっと、それじやちょっと賭けしません？」
「賭け？」
「もう1回敬幸がフリースローラインからショートして入つたら敬幸の勝ち。負けたら私の勝ち。負けた方は勝つた方の言う事を何でも1回聞く。つてのはどうですか？」
「・・・お前、俺素人なんだぞ？そう簡単に入つてたまるか・・・」
「さつきと言つてる事が変わつてますよ？それに、だからチャンスなんじやないですか！簡単に入つちゃ賭けになりませんし」
「・・・言いたい事はわかるが、文句を言いたい理屈だな」
「細かい事は考えちやいけません！」
「ま、いつか。とりあえず10回くらいうで練習させてくれ」
「じゃ、賭け成立ですね～」

パサツ、パサツ、パサツ、ガソツ、パサツ、ガソツ、ガソツ、パサツ、パサツ、パサツ

練習、10本中7本成功・・・

「敬幸つてホントに・・・バスケ素人なの？」

「ん？別に上手くないだろ？あんまりバスケしないし」

「・・・充分上手いと思う」

「そうか？俺はバスケよりもサッカーの方が好きなんだけどなあ・・・」

「ねえ・・・私の方が騙されてない？」

「なんか言つたか？」

「いや、なんでもないです」

「それじゃ、本番つて事でいいか？」

「納得出来ないけど、オッケ・・・」

敬幸はボールを頭の前に掲げ、目をつぶり精神を統一させる。

わずかな照明に照らされたバスケットコートに静寂が訪れると敬幸はにわかに目を開けた。そして普段はあまり見ることの出来ないキリッとした表情を作つたかと思うと、ボールが静かにゴールに向かって敬幸の手を離れる・・・

理想的な弧を描いたボールがゴールへ向かつて行く・・・

パシヤ・・・

第16話 賭け（後書き）

次回予告

第17話 願い

お願い何にしようかなあ～

第17話　願い

パシャ・・・

敬幸の手を離れたボールはゴールの網を掠めてそのまま地面に向かつて行く。

見事なエアボールだった。。

「・・・・・」

「え～っと・・・・・」

「もしかして、敬幸ってプレッシャーに弱かつたりする?」

「あははははあ～・・・・・」

「ナイスプレッシャー！～！」

「あ～・・・ワンモアチャンスプリーズ」

「だあ～め お願い何にしようかなあ～」

俺、今日大切な何かを失ったのかもしれない・・・

「で、何でお前がここにいるんだ?」

「だつて、何でも言つ事聞いてくれるんでしょ?」

「いや、だからってこれは・・・」

散歩から帰った俺と香織は（言つまでもないが無理矢理腕を組まれた）今俺に宛がわれた寝室へと戻っていた。引きつった表情をしているであろう俺のベッドの中には何を思つたか香織が潜り込んでいる。

「あのな、いくら無邪氣にしてたつて無理なもんは無理なの!」

「男らしげ一度約束したことは守りなきや」

「……思つんだが、お前つて都合が悪くなると俺の話聞いてないよな？」

案の定香織は敬幸の話など全く聞いておりず、「早くー早くー」と自分が寝ている隣のスペースをバンバンと叩いている。

「やっぱ聞いてくれないんだな・・・」

そう落ち込みながら敬幸は香織の催促が止まつそうになかったので洪々ながらベッドの端に腰を下ろす。嬉しそうに敬幸のTシャツの裾を握る香織。

「逃げんから離せ、伸びるだろ・・・

「離さないもん~」

「」のワガママ娘め。。

「お前は猫か!?」

「」

「ウサギです!-」

「は?」

「寂しいと死んじゃうんですよ!-」

「・・・わけ分かんね」

「とこりどもお前・・・本氣でござるつもつなのか?」

「・・・・・・」

「おこ、青葉?」

「・・・・・・」

「お嬢様、ついに強硬手段ですか?」

「すう~すう~すう~・・・」

「え~っと、・・・もしかして?・・・

「すう~すう~すう~・・・」

「マ、マジですか・・・?」

「すう~すう~すう~・・・」

「青葉さん、裾離してもらわないと動けないんですけど～？」
「すう～すう～すう～・・・」

「おいおい、お前は俺の理性を過大評価しそぎじゃないのか？これ
でも一応男なんだが・・・」

自嘲気味につぶやいた敬幸の声は誰にも聞かれることはなかつた。

そして、考える人並にベッドの端で考え込む敬幸の姿がそこにあつ
た・・・

第17話　願い（後書き）

次回予告

第18話 香織の陰謀？

俺は見てはならないものを見てしまったのだろうか？

第18話 香織の陰謀？

結局、Tシャツを脱いでなんとか虎口を脱出した敬幸であったが、このまま部屋にいてはただ悶々とするだけだったのでリビングの方に非難していた。

「なんか色々な意味で失ったものは大きかつたかもしね……ていうか、寝れそうにねえ……」

心の中の声がダダ漏れ。これから再び星を見に行くのもどうかと思つたし、テレビを付けてもどのチャンネルもテレビショッピングか砂嵐で見る気が起きなかつたので近くに放置されていた雑誌を手に取つた。誰の雑誌か知らないが、女性誌だつたけど暇つぶしにはなると思つて適当に開いてみる。するとバカになつていったページがあつたらしく、真ん中あたりのページが自然と開かれ、目に飛び込んできた文字があつた。

『気になるあの人を落とす100の方法！』

「…………なんだこれ？」

その1 曲がり角で偶然を裝つてぶつかる！
その2 あの人を掴み取れ！
・ · ·

そのうう、『どうにもならなかつたら既成事実！』

この際、『100の方法！』とか言いながらううまでしかないって事は問題じゃない。

・・・・・なぜこれにアンダーラインがひいてあるんだ？

『どうにもならなかつたら既成事実！』と書いてある所に真っ赤なペンでしつかりとアンダーラインがひいてある。

てこうか、『その2』の左側のように既に『×』マークがしてある項目もあるし・・・俺は見てはならないものを見てしまったのだろうか？

その前によく考える。もしかして今さつきのは既成事実を狙つたのか！？

いや、あの雰囲気でいつにそんな打算は・・・ないと切に信じたい。

言つまでもなくこれは香織の雑誌だろ？。

「ま、何もなかつたんだし、これ以上考へても意味ないか・・・」
いくら考へても答えなんか出るわけもなく、考へることを放棄した
俺は、手にした雑誌を元にあつた場所付近に放り投げた。

でもやつぱりすることなくして、携帯をいじっていた俺は知らない間に意識をなくしていた・・・

第18話 香織の陰謀？（後書き）

次回予告

第19話 大和撫子

お前、変わったなあ・・・

第19話 大和撫子

「ねえ、村上くん？起きて……ねえってば……もしもお~し
？ 村上くん村上くん、いらっしゃいましたら一番テーブルまで~
！ ・・・ しじょうがない、奥の手だ！えい！~！」

そういうて敬幸の頭に思いつきつチョップが打ち込まれる・・・

「・・・ツー」

「あ、おはよ~いります」

「痛つてな~・・・いつたいなんだよ・・・」

「え、朝？」

「なんで疑問系やねん！」

「いうか、俺何弁！？」

「じゃ、朝です」

「・・・で、今何時？」

「5時」

「・・・は？」

「だから、5時です」

俺が寝たのは多分4時過ぎ・・・つて、1時間も寝てないじゃん~?

「あ、あの・・・眞鍋さん？」

「はい、なんじょ~?」

「なぜこんな時間に？」

「だって、こんなトコで寝てたら風邪ひきますよ~?」

いや、確かにそなうなんだけじね、自分ベッドでじや寝れない訳
が・・・

「あ、ああ・・・」

「部屋、戻らないの？」

「まあ、色々あつてね・・・」

「？？？」

「男には色々あるのセシ、ふつ・・・」

「・・・今はそゆ事にしておいてあげるわ。村上くんの頭がおかしいのは今に始まつた事でもないしね。あと、それ似合つてないよ？」
哀愁漂うハズの俺の決めポーズをバツサリと切つて捨てる眞鍋さん。

ヒドイです・・・

「そりやありがたい」とで・・・で、お前はなんでこんな時間に起きてるんだ？」

「えへっと、目が覚めたついでに何か飲もうかと・・・って、あつ！」

「何・・・？」

「村上くんも何か飲む？」

「あ、ああ、ありがと」

「それじゃ、コーヒーでも入れて頂戴」

「えへっと、俺が入れるの？」

「男の子は細かい事気にしちゃダメだよつ」

「そゆ問題じや・・・」

「はいはい、早く入れた入れたっ！」

あの・・・眞鍋さん？なんか誰かさんのキャラ入つてしません？

「はいはい・・・」

俺はキツチンに向かい「コーヒーを入れ始める。豆を挽くところから始め、ドリップさせる。さすがにウォータードリップする時間なんてない為ペーパードリップだが、まあそんなものはこの際どうでもいい。

「まあ眠気覚ましにはちょうど良かつたかもな

そうしてボーッとしている間にコーヒーが出来、それをカップに入

れてテーブルまで運んだ。

「おまたせ～ブラックでよかつた?」

「砂糖とミルクお願ひします」

「・・・自分で動くつて選択肢はないわけね。了解しましたお姫様」

「うむ、くるしゅうないぞ～」

「はあ～・・・お前、変わったなあ～・・・

「ん? そう?」

「ああ、変わったよ・・・」

確か真鍋への第一印象は『大和撫子』だったハズ・・・

「

その面影は今はなし・・・

「はあ～・・・俺の周りにはこんなのがつか・・・」

俺の今の仕事はこのワガママお姫様に砂糖とミルクを運ぶ事・・・
はいはい、やればいいんでしょ。
つたく・・・

第19話 大和撫子（後書き）

次回予告

第20話 取調べ

ユキ、僕は浮気は良くないと思つよ？

第20話 取調べ

「あれ？ その組み合せは珍しいね？」

「んあ？ ショウか、おつす～」

「杉原くん、おはよりびります」

振り返れば寝起きのくせに全く隙がない雰囲気でショウが立っていました。時計を見ればもうそろそろ7時をさそうとしていた。いつの間にか眞鍋とかなり話し込んでいたらしい。

「一人ともおはよつ。朝から密会してるのは思わなかつたよ
「おいおい、お前朝っぱら飛ばすな。密会つてなんやねん！
「違つたの？ ユキ、僕は浮氣は良くないと想つよ？
「村上くん、浮氣なんて・・・サイテー・・・
「・・・」

いやいやいや、ちよつと待て！この場合の浮氣の相手は眞鍋つて事だよな？ 真鍋さんや、お前がそれを言つのか？ つて、ちよつと落ち着け！ 僕！ 浮氣つていつたい何だ？

『浮氣：1、心が他に移りやすいこと。移り気。2、配偶者などがありながら、他の異性と関係を持つこと。（国語辞典より）』
ま、待て！ 今は浮氣の意味を調べてる場合じゃないな。冷静な振りしてかなりテンパつてるかもしれない・・・僕、何に対しても『浮氣』って言られてんだ！？ いや、なんとなくは分かるが断固として違うぞーうん、そこはしっかりしておかなくては・・・

「ちょっと待て。お前たち、冷静になろ？」

「僕たちかなり冷静だよ」

「うん、やっぱり僕テンパつてる気がするだよ・・・

「俺、浮氣なんかしてないだろ？」

「……じゃあ、本気だったの…？」

「(ぱつ・・・)」

おいおいおいおいー眞鍋さん、何赤くなつてゐるのさー?ボクニハリ
カイデキマセン・・・!?!?

つて、何現実逃避してゐんだ俺!?.落ち着け、そういうえばショウが
本気とか言つてたな。何が『本気』なんだ? オイラニハワカリマセ
ン・・・

ああー!頭が働かない! そりいえば俺ほとんど寝てないんだった・
・

「お前たち・・・朝からなんでそんなテンションでいけるんだ?
「だつて、面白いから?ねえ?」

「ねえ」

「・・・はあ・・・」

「でも、昨日村上くんと青葉さんが外歩いてるの見ましたよ?」

「・・・ツ!?. そ、そりや外歩くこともあるだろ。ここには6人
しかいないんだから、20%の確率でそうなるだろ?」

お、俺ナイス切り返しじゃない? あとはこのままこの話をひもむか
に・・・

「深夜に腕組んで歩いてたんだけ?・・・むき合ひのんじやなか
つたんですか?」

この娘はなんて爆弾を・・・!

「偶然ね、星見てたら外で会つた。それだけだ。それ以上でも、そ
れ以下でも、断じてない!」

「ふう〜ん・・・」

ショウさんや、そのニヤついた顔をするのは止めてください・・・

て、どうか、その役回りはナオじやなかつたっけ？おぬしはオールマイティイーだつたのか！？

目の前には納得できないような顔をしている爆弾娘までいるし、この先どうなるんだ俺・・・

て、いか、これまで通り否定し続ける事には変わらないんだけどね。ある意味それが今の状況を作り出してる原因だつて事くらい俺にも分かつてんんだけど、肯定することは出来ないから・・・

この取調室と化したリビングから一秒でも早く逃げ出したい。

そして俺は激しく主張したい！

ね、寝たい・・・

第20話 取調べ（後書き）

次回予告

第21話 平和の為に

お前、今寝たらまた氣絶だろ

第21話 平和の為に（前書き）

PV累計アクセス10万突破ありがとうございます。
いつ最終話を迎えられるか自分でも全く検討が付かないグダグダつ
ぶりですが、これからもお付き合い頂けたら嬉しい限りでございま
す。

第21話 平和の為に

「おひはよー」「……まためんどくさいのが来た。いつたい俺は何時になつたら寝れるんだ?」

「よお・・・」

「なに? なんでユキ『元気ない』の?」

「さあ? ねえ?」

「朝だからじゃないですか?」

「・・・あなたたちのせいですよー!」

「いや、朝だからこそ『元気』に・・・」

ガコツ!

痛そ・・・シヨウも容赦ねえな・・・まあ下ネタをいきなり吐くな
オも悪いけど。

「ところで、なんでユキがここにいるの?」

・・・今度は存在を全否定ですか?

「なにが?」

「だつて、ユキの部屋から香織ちゃん出てきたぞ?」

・・・あう・・・・・

「へえ~私は昨日村上くんが青葉さんと深夜のデートしてたの見た
よ

「ユキ・・・おめでと!~..」

「なにがやねん!」

「お~!お手本のよくなシッ『ミー!』

「一瞬関西人かと思つちゃいました~」

「(ぱちぱちぱちぱち~)」

・・・なに、この人たち・・・

「ねえ、泣いていい? むしろ泣きます・・・」

「おお～よちよち・・・」

「そう言いながら俺の頭をなでてくれる眞鍋・・・これはこじめですか

? いや、こじめですね?」

「さて、今日のところれいらじこしておきますか

「だね～十分楽しめたし

「ユキ、GJ!」

「は・・・?」

「だつて、私村上くんがソファーで寝てたの知ってるし? 一緒に寝てたわけでもないのに何かあるわけがないじゃないですか?」

他の二人もうんうんと頷いている。いや、ちょっと待て。シヨウはいい、ナオトは知らないだろ?

「はあ～・・・まあいいや。青葉が起きたなら、俺ちょっと部屋に戻つて寝てくる・・・」

「おいユキ! 寝ないほうがいいんじゃない?」

「え? なんで・・・?」

「だつて、なあ～?」

問い合わせられた他の一人も頷いてくる。いや、あんまりわざわざ

つきの場面繰り返えし起こさなくていいから――

「だから、なんだよ!」

「今日、俺たち帰るんだぞ?」

「またへり乗るんですよ?」

「お前、今寝たらまた気絶だろ」

「・・・・・」

見事な三連コンボでした・・・

結論から言つと、俺はへりには乗らず電車で帰つた。断固拒否つてやつだ。

『家に帰るまでが遠足だ！』ってお決まりのフレーズで文句は言われたがしうがないだろう。実際に一度氣絶してたし、あまり責められる事もなく、一人へりに乗らなかつたわけだ。

そして誰も俺に付き合つて電車で帰つたやつはいない。なんて薄情なやつらだ・・・

まあ、約1名俺がへりに乗らないなら私も電車で帰るとか言つてたが、お前が乗らなくて他の奴だけ乗れるわけないだろー！とへりに押し込めた。

正直、誰の為とか関係なく、俺の平和の為なのだが・・・

第21話 平和の為に（後書き）

次回予告

第22話 兄妹の絆

ふざけないでよ！何の連絡もないし、警察に届けようつかと思つてた
くらいなんだからね！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6243d/>

俺とお嬢様と、時々親友（仮）

2010年10月14日14時15分発行